

埼玉県立高等学校の共学化に関する意見交換会(高校生の部・東部会場)

1 日時 令和7年7月25日(金) 14:00~16:00

2 場所 越谷コミュニティセンター 特別会議室

3 参加者 6名

4 教育局参加者

高校改革統括監 依田 英樹

県立学校部区参事 出井 孝一

5 概要

(1) 依田高校改革統括監 挨拶

(2) 意見交換会

まず、今日参加されている皆さんから、お話をいただこうと思っています。自己紹介としてお名前とか学校とか、話せる範囲で結構です。中にはお名前など本日公表されないというご意思をお持ちの方もいらっしゃると思いますので、自己紹介を自分の紹介できる範囲でお話をいただいて、併せて皆さんの県教育委員会の報告書に対するご意見でも構いませんし、自分のお考え、男女別学・共学に関連したお考えを伺えればと思います。そのお話を伺った上で、意見交換を展開していきたいと思いますのでよろしくお願いしたいと思います。スタートしましょうか。Aさんからお願いします。

(A)

この意見交換会において、中3のときからジェンダー平等とか、その教育の話とかを講習で学んできた経験とかもあって、すごく興味を持って、意見交換会に参加しようと思いました。私は、共学にいますが、それでも、別学で過ごしている子が友達にもいるんですけど、その子たちの生き生きしてるところを見て、中学校の時とかはあんなに話してなかったのにとかと思ってて、私はとても嬉しかったです。それで、別学だと、偏見が広がるっていうわけでないと思う。男女がないからこそ、男子はこれ持ってよとか、女子は、綺麗に字を書いて、まとめてあげるねっという話とか、無意識のうちに固定されてるところもあったりすると思う。男女別学だと、男子同士、女子同士だから、そういうことが起こることはなくて、それもまた魅力かなって思ったりしています。

(B)

私はAさんと一緒にガールスカウトという団体に活動していて、そのガールスカウトでは、昨年からジェンダーについて学んでいて、一人一人でジェンダーについて一つ自分が興味がある問題について考えてみようっていうテーマがあった時に、私はこの共学化について考えようと思いました。

その理由としては、以前、県教育委員会の方からアンケートをお願いしますというのが来ていて、私もアンケート答えたんですけど、そのアンケートの結果を見て、やっぱり共学化しない方がいいっていう意見が多かったの、埼玉県内では共学化しない方がいいって思ってる人がいっぱいいる中で、県教育委員会の方からは推進していきますというふうに来ていたのが、疑問に思ったことと、先ほど依田さんがおっしゃっていたアンケートだけでは意見が集めきれないっていうところで、新しい疑問なんですけど、集めきれなかったという時点でも共学化の反対が多い中

で、共学化を推進しますっていうふうに報告したのはどういう理由があるのかなということが気になりました。

(D)

僕はこの意見交換会に出ようと思ったきっかけはニュースなどで、共学化の問題を取り扱っていることがあって、そこで疑問に感じた点があったからです。

この共学化の問題は、そもそも共学化するかしないかっていうこの議論をするべきではないと思います。その理由としては、1件の苦情が県の苦情処理委員の方に来たっていうお話を伺ったんですけど、その1件の苦情が、来たぐらいで共学化するかしないかという議論には普通ならないのかなと思いました。以上です。

(E)

私がこの意見交換会を知ったきっかけは、同じ学年の B さんからこの話を伺って、元々共学化について興味があったということと、去年の夏頃に行われた別学の生徒会の方々が、県教育委員会の方に、多くの反対の署名を持っていった会が行われたニュースを見まして、クラスの子も参加していたので、すごく気になっていて、そんなに多くの署名があってそのような会を開いたのに、そのまま共学化を推進する理由や、私は別学に在学しているので別学への愛があるわけですが、その共学がどのようなものか理解してないという点もありますので、共学の方の話を聞いたりですとか、共学化を進めたいと考える人たちの意見も聞きたいと思い参加させていただきました。

私の意見としましては、その別学の学校が今、倍率が割れているものが少ないのもあって、その別学だからこそのニーズもあるのかなと考えています。例えば、私が所属している音楽部という合唱を行う部活なんですけれども、その合唱の方では、県の合唱コンクールの上位に、多くの別学校が入っておりまして、特に浦和第一女子高等学校さんや松山女子高等学校さんは全国大会でも1位、3位に入賞するレベルの伝統を持った高校になっています。共学化をしてしまうことで、今までできていた女性合唱の伝統が崩れてしまうのではないかという意見があるので、私は共学化に反対します。以上です。

(F)

今回の意見交換会に興味を持ったきっかけは、自分の学校でも頻繁に共学化に関しての話が生徒の中ですごく飛び交っていて、学校の方からも今回の意見交換会に関するお知らせがあったので、参加させていただきました。

私の立場は、共学会に対しては反対です。その理由は、賛成側にも反対側にも様々な意見があると思うんですが、反対側の主張が全て合理性がないというわけでもないですし、そもそも共学化っていうのは、立法ですから、その立法というのは、現行の制度に対して、より大きなメリットを示さなければ、立法というのはできない。それにもかかわらず、共学化に対して、このまま別学でいくよりも大きなメリットをまだ示せてないっていうのが今の現状だと個人的な解釈しておりますので、反対っていうのが私の意見です。

(G)

私は共学化については反対です。理由としましては、私は1年間海外に留学をしていて、向こうではもちろん別学校がないので共学校に通っていました。ここで様々な経験をしたのですが、海外はやはりジェンダーギャップが少なくてLGBTQの方への配慮があったりとか、そもそも男

女での差別が起こらないようにしているように感じるかもしれませんが、実際はそんなことなく、女子生徒に対する加害であったりとか、授業内での差別もかなり多くありました。留学先では、女子というだけで平等な教育の機会を得ることができませんでした。埼玉県に別学校があって、女子教育を行っているということは、社会的に見ても大きな意義があると思いました。

(依田 高校改革統括監)

一通りご意見をいただきました。皆さん反対ですね。皆さんからいただいた意見から、意見交換を進めていきたいと思うんですが、まず B さんですね。アンケートの意見で反対意見が多かったのに、県教育委員会が推進の方針を出したのは、納得がいかないというような趣旨だったと思います。また、こういう意見交換がさらに必要なぐらい、アンケートではまだ十分な意見が集められてないという認識があるのに、方針を出したことに對しての疑問も併せてありましたね。

県教育委員会の考え方を、お話をします。県教育委員会が今回アンケートをしましたのは、いわゆる多数決を取るためにやったものでなく、いわゆる世論調査をやったものではないです。今回、私どもが苦情処理委員に出そうとしている報告書を策定する上で、意見がある方について意見を寄せていただく、ご関心のある方に意見を寄せていただくという趣旨のアンケートです。実際別学の方からたくさんアンケートを寄せていただいています。共学の方からは比較的少ない結果でした。全県立高校の生徒のうち別学校の生徒は約1割ぐらいいますが、アンケートに回答いただいた高校生のうち、別学校の生徒は約3割でした。世論調査という形で、不特定多数に、学年や男女比や地域のバランスなども図って行ったものではないのです。私どもとしては今回、特に別学に通われてる皆さんはどのような内容の反対をされているのかに非常に関心があります。別学を希望されて別学に行っている方々が多くアンケートを寄せていただく以上、反対が多いことは、想定はされたことですが、どのような理由で別学を選ばれたのか、別学を選んだ理由と、別学に通われて実際どう思っているのか。また、その共学化についてどのような意見を持っているのか、その内容について私どもは大変関心を持って、しっかりと県教育委員会で議論をしました。先ほど共学化推進の方針を出したのが疑問だという趣旨だったと思いますけれども、県教育委員会は共学化を推進するという考え方は、以前から一貫して、共学化を推進する立場でいました。

その理由については、また意見交換の中で触れていこうと思いますけれども、それぞれの学校の持っている、歴史であるとか、住民の皆さんの考え方であるとか、在校生、またこれから進学される中学生の考えも含めて、それぞれの学校の中で検討をするように、私どもはこれまでしてきたんです。昨年までですね。その結果、何校かの学校は共学化になってきたわけですが、それを今回、各学校にお任せするのではなくて、県教育委員会が主体的に判断することに今回方針を転換しました。

今までは学校に、よく学校の状況を見て、学校が今後どうあるべきかを考える中で共学化を考えてくださいと言ってきたことを、これからは、県全体を見回しながら、県教育委員会が主体的に進めていくことにしましたということが、昨年の報告書のポイントの一つです。

今回、なぜその意見交換をまたするのかという 2 番目の疑問なんですが、先ほど申し上げましたように、これまでいろいろ、意見を出していただきました。

別学校の生徒さんが、異性のいない中で伸び伸びと生活ができることを大変喜ばれている、伸び伸びと生活する中で、体力や学力を伸ばすことができたという実感をお持ちの生徒さんがたくさんいることもよく分かりましたが、個々の顔が見える中で、具体的にお話をもう少し掘り下げて伺ってみたいと思ったのがその趣旨です。私どもが、昨年報告を出す中で、去年と今年、来年と、生徒さんも様々変わっていきますし、世間も変わっていく中で、どのように皆さんのご意見

がこれから変わっていくのか、また、変わっていかないのかということも含めて、継続して伺っていく必要はあると考えました。その観点で今回の意見交換会を持たせていただいたところです。

話を戻させていただきますね。先ほどお話をいただいた中で、Aさんは、共学校に通われてるというお話でしたが、一方で、別学に通学した人は、生き生きしてる姿を見て、性別にとらわれることがなく、生き生きとした別学の生活を見て、別学はあった方がいいとお考えになられたという趣旨でした。

皆さんにご意見を伺っていきたいんですけれども、どうして、異性がないと生き生きした生活が送れるのか、実際自分は異性がないから生き生きしているという方がいらっしゃる、お話を伺いたい。

(B)

私は中学時代は男子もいる環境だったんですね。高校になってからの方が喋る回数というか口数なんかより活発に話すようになったなと感じている。なぜかという、中学校の時は、教室の座席が男子同士、女子同士が隣合わせや前後にならないように、そういう席の並びだったが、高校だとどこを見ても全員女子しかいないので、休み時間も隣の人とお話したり、授業中も分からないところの相談だったりとかも、中学時代よりも高校の方が話しやすい。男子よりも女子の方が話しやすかったというふうに感じています。

(依田 高校改革統括監)

同性の方がやっぱり話はしやすいですか。そこは意見はいかがですか。男性の方はやっぱり男性同士の方が話をしやすいですか。

(F)

中学時代と比べて男子しかいないので、共通の話題っていうのが生まれやすいこともありますし、クラスとかで盛り上がる時とかも、中学時代の共学だと周りの異性の目っていうのがあったり、当然、男女が半分ずつなので相対的にも男子の数も少ないですし、別学になるとそれが2倍なので、盛り上がりとか、みんなの意識っていうのは一致しやすいかなっていうところがあり、そういったことから生き生きしやすいのかと思います。

(E)

私は中学時代、共学だったんですけれども、別に男子に対して話しにくいと感じたことはないんですけれども、共学ならではの、女子はおしとやかというレッテルを貼られたりだとか、あとは気が合う男子がいても仲良くしすぎると、色目を使ってるように見られてしまったりだとか、そういうことがあって、私も共学に通っていたけれども、周りで話すのは女子が多かったと感じていますし、今別学に来てどんな人とも楽しく話せるので、周りの目を気にせずに話せるようになったのは別学でよかったことのひとつだなと感じています。

(G)

私は元々中学校は共学校に通っていたため、受験をする時も共学にしようと思ってました。元々異性とのコミュニケーションにも特に問題がなかったのも、中学校と同じような環境の共学校に通おうと思っていたんですけれど、留学をするとなると、今の学校が一番留学へのサポートが手厚かったのも女子校に通うことになりました。

女子校に通って一番良かった点は、性別などの不当な理由で評価の差が出ないところです。中学生の時に、女子の体育の成績は、男子よりも良くなっていました。私も全く体育得意じゃないのに、女子ってだけで成績がよくつけられてたことに納得していなかったんですけど、女子校に通い始めて、そういう性別によって評価の違いが出ないことで、すごくフェアな評価がされていると思って、それでモチベーションを維持できてますし、体育の授業も楽しいと思えているので、そういった面では異性のいない状況で、性別によって優遇されることがない環境で学べていることが、自分にとっては良かったと思っています。

(依田 高校改革統括監)

分かりました。中学校では、男子と女子で評価の違いがあるなって感じでいらっしゃったんですか。

(G)

強く感じました。

(依田 高校改革統括監)

男子と女子で、いわゆる学校の評価だけではなく、教育活動の中もそうかもしれませんが、中学校時代、高校時代含めて、男子と女子で扱いが違うとの考えをお持ちの方はいらっしゃいますか。共学校ではどうですか。

(A)

教師の態度がちょっと違うかもしれない。男子だとすごく厳しいんです。グラウンドを走る時に少し喋るぐらいで、1周回ってきたらすごく大きな声で怒っていた。逆にその先生が女子を担当した時があったんですけど、話をしても笑っていた。先生自体にも問題があるとは思いますが、目に見えちゃうと、支障があるのかなって思ったりしてます。

(依田 高校改革統括監)

そのほか、思い当たるようなことがあれば。

男子と女子の違いを皆さんがどう考えているのかを伺おうと思っている。同性だと話しやすい。同じ話題もあるし、意識も同じ意識を持っているというような趣旨のお話もありました。男子と女子っていうのは違いが、骨格が違うとか、背が高い低いとか統計上で、走る速さが違うといったことは、あるのかもしれませんが、学校の生活、教育活動の中で、男子と女子が違うカリキュラムであるとか、違う教育内容であるとか、Aさんからあったように違う指導方法であるとか、そういったものを皆さんはどう考えているのか、それが良い教育なのか、それともそれはあまり望ましくない教育だと思うのか、その辺ご意見があれば伺いたいと思う。

(E)

別学に通ってるのもあって、あまり男子が行っている教育について詳しくないので、Fさんに男子校でどのような教育を受けているのか質問してもよろしいでしょうか。

例えば体育の時間ですとか、共学の時に通って行ってたことと、何か男子だけになって変わったこととか授業内でありますか。

(F)

体育の授業では、中学時代よりもよりハードになったりというのはよくあるんですが、勉強という面だと特に中学時代と差異はないかなと思う。体力的、身体的な差は、それは男女間で、どうしても身体的な差はどうしても出てしまうので、体育の授業が厳しくなるっていうのは、ある程度考えられることなのかもしれませんが、身体的な差異が出にくい勉強に関しては特に中学校として今の男子校でも特に差はないかなと、自分の肌ではそう感じます。

(依田 高校改革統括監)

例えば学校行事とか、勉強と体育じゃない学校生活においては何か、男子校は共学と違うって思うようなところなんてありますか。

(E)

文化祭は女子校とは少し違うと思うのですがどうでしょうか。

(F)

文化祭は、女子がないので、共学の文化祭はあまり行ったことがないので違いが分からない部分があるが、共学と違うなって言われるところは、ミスコンというのがあって、まあ、男子が女装して、一番のかわいさとか決めるとか、そういう特有のイベントはあったりする。

(E)

女子校も男装コンテストが以前ありましたね。今でもカップルコンテストっていうのがあって、同性同士なんですけど、カップルを演じてどれが一番面白かったのかとかいう競う行事があるので、そこは結構別学ならではのなと思います。

(依田 高校改革統括監)

女装もあるし男装もあるということですね。Dさんは、男子校ですけど、何か男子校ならではの違いを感じたことはありますか。

(D)

あります。部活動の選択であったりとか、文理選択の時に私は共学でないのであんまり分からないんですけども、共学だと、例えば吹奏楽とか、女子が多いから、興味があっても男子が敬遠したりすると思うんですけど、別学校では、自分の興味があることに、挑戦できると思う。

(E)

今の意見はすごく面白いと思いました。確かに別学ならではのと思います。私もその方がいいと思っています。

(依田 高校改革統括監)

ほかはどうですか。最初のテーマに戻ります。男子校のカリキュラムであるとか、学びであるとか、女子校のカリキュラムであるとか、学びであるとか、共学の学びであるとかについて、違いはありそうな感じもありますよね。これは皆さんにとってどうですか。どう思いますか。男の人と女の人とそれぞれ分けて学んでいく、違う学びがあるのかについて、どう思いますか。

(E)

別で学ぶことで得られる良さもたくさんあると自分自身感じてはいるんですけども、そのずっと別で学んでるっていうのはまた違うと思っていて、そのどこか社会に出たら男子と女子、同じ場所で活躍しなきゃいけないことが今多いので、教育で別で学ぶことも大切だと思うんですけど、一緒に学ぶことも大切だと思うので、全てがこの別学になるべきというわけではないんですけども、やっぱりその別で学ぶことで得られることもあるので。その辺も大切だと思います。あとはその身体的にこの男女の差があるのは仕方ないと思っているんですけども、でも知識的なものはなるべく対等に学んだ方がいいと思っていて、例えば小学5年生や4年生の時に女子は生理について、女子だけ教室に集められて教育をするっていう場面があって、それについては、男子も同じように同じ場で学んでもよかったんじゃないかなと思う場面もあるので、その内容にはよるんですけど、一緒に学ぶっていうことも大事だし、でも、別で学ぶことによる良さもあるので、どちらも大切なので、選択肢としてはあってもいいかなと思っています。

(F)

自分も男子と女子で学ぶことが違うのはこれはよくないなというのは思う。小学校・中学校で共学で、高校で男子校という自分の経験からの話だと、共学でしか学べないことがある一方、共学では学べないことがあるんですね。一方、別学でしか学べないことがあって、一方、別学では学べないことっていうのがある。中学校まで共学で学んで、その後、別学に行くともまた新たな学びっていうところがあって、それぞれでしか学べないことを補填するという観点からは、共学別学どちらでも男女で学ぶ内容には若干違いはあるものの、まあそれぞれお互い共学と別学で補填はできるので、現状別学っていうのは存在意義がここにあるんじゃないかなと思う。

(G)

私も学びの面では、共学と別学で大きな違いはないと思いますが、家庭科の授業などで女性の社会的活躍をどう促していくべきかなどの女子教育が行われているのは、別学の良さとしてあるのではないかと思います。

もしかしたら少しズレてしまうかもしれないですが、海外で共学に行っていた経験からすると、やはり体育の授業とかはかなり違うなと思っていて、日本でも中学生は体育の男女共習が3年前から始まっています。海外の学校も体育の授業は男女共習でやっていました。その時は、バスケットボールとかバレーボールそういった競技全く関係なく男女一緒に行っていました。もちろん身体的、骨格的な違いもありますし、男子から女子への性的加害が私のクラスで起こってしまい、体育の授業に参加する恐怖心みたいなものをかなり感じてました。私のクラスにいた女の子は、体育の授業はほとんど参加できずに外で見ているだけになってしまっていたのがすごく印象的でした。日本の中学校における体育の男女共習化によって、どのような授業が行われているのか資料を確認してみましたが、私が経験したことと似た部分もありました。前提として、性別の違いによって起こる性的加害を防げないのにも関わらず、男女共習にして女子が体育に参加できないような環境ができてるのはすごく大きな問題だと思っています。それが中学校だけでなく、高校にも広がっていくと、女子校で女子だけの体育の授業を頑張っていきたいという生徒ももちろん増えると思いますし、今中学校で男女共習で体育の授業を受けていて、不快な思いをしている女子生徒、男子生徒どちらもいると思うので、そういった学生に対して別学校を選ぶ選択肢を奪っていくのはどうなのかなと思います。

公立の学校から別学校がなくなると、私立の学校に通わなくてはいけなくて、経済的格差が生まれてしまうと思います。お金がある人だけが、私立の別学校を選べる環境になるぐらいだった

ら、公立の別学校を残して、そういった嫌な思いをしてきた生徒に対して、フェアで性的被害が少ない学校を提供していくのも、もう一つの社会的意義があると思います。

(依田 高校改革統括監)

大切な観点ですね。続けて、Aさんどう思いますか。別々なカリキュラムがあったり、別々な学びがあるってことについてはそれについてはどう考えますか。

(A)

私は、それは良いと思ったりします。私の学校も中学校の時は、Eさんの言ってたように、月経とか生理の話男女別々でやっていました。高校生になったら、男女に分かれて講義をする時間が1回だけありまして、その時はデートDVの話聞いたんです。その時女子だけだったんですよ。でも、デートDVの話は両方で聞いた方が良くないかって思ったりしました。あと、学びの違いとは外れますが、小中学校で仲良くしてた男女とか結構、隔たりがなく思春期とかなくて、そうやって仲良くしてる子とかで、そういうのが多いんですけど、それで高校になってくると、また違う子がいっぱい来ることになる。小中で男子が大丈夫だったから、高校も共学で大丈夫かなって思ったりしたら、なんか全然違ってたっていう子が結構いました。

あと私は、小中学校の方は話せてたんですけど、高校になったら変わったというか、男子と話したりもするんですけど、頻度は女子の方が多いというか、気楽に話せたりできるのは女子の方。男女の交流でストレスで不登校になっちゃうことがあるんだったら、私は救済処置として別学があってもいいんじゃないかって思ったりします。通信制とか定時制とかも、選択肢もあると思うんですけど、日中でみんな、同じ時間でやった方が、同じ経験してた方が社会に出てもつながりがあり話しやすいでしょうし、それもいいかなって私は思います。

(B)

私は、教育やカリキュラムに対しては、共学の高校に通ったことがないので比較できないんで、教育の差があったりとかについて、言えることがない。今のお話を聞く中では、具体的なカリキュラムの差がなかったように感じていて、カリキュラム以外に何が違うのかって考えた時に、学校ごとの伝統だったりとか、部活動の選択の幅のところに、別学と共学を選択する時に重要視する点がそこにあるのではないかなと思っています。

(依田 高校改革統括監)

先ほど、男子校での教育の違いがありましたけれども、そういう違いがあること自体、Dさんは良いと思っているわけですね。中学校の時の共学は一方ですでしたか。男子と女子が一緒にいることで良いこととか、また良くないこととかっていうのはありましたか。

(D)

自分が思いつくのは、共学だと体育の授業で、男子と女子で別々にやってるような感じなので、あまり一体感が持ててないっていう印象を受けるんですけど、別学校だと全員で同じ競技ができるので一体感を持てるのがよいと思う。

(依田 高校改革統括監)

お話を伺って、別の良さもあるというご意見は多かったと思いますし、一緒に学ぶことも大切だとのご意見もあったと思います。県教育委員会の考え方を、皆さんにお話をしますね。

県教育委員会は、男子と女子とで同じ内容を学ぶことをよしとしています。男子と女子で違う内容の学びをよしとはしていません。同じことを学ぶべきだと考えています。先ほどカリキュラムの話がBさんからありましたけれども、カリキュラム的には今男子と女子で目に見えて外形的に変わりがない形になっています。以前は、女子は家庭科、男子は技術科と変わっていた。以前は男性は、例えば、お金を稼ぎに仕事に行くためにこういう学びをした方がいい、女子は将来、家庭に入って子供を育てるためにこういう学びをした方がいい、別の学びをした方がいいという社会的な考え方みたいなものが、数10年前まではあった。県教育委員会も各学校にそういう学びをしてくださいねとしていた。

今はそれはありません。男も女も協力をして、男女共同参画という言葉がありますけれども、お互いにそれぞれの個性に応じて得意・不得意を補いながらまた得意なところを伸ばしながら、社会で活躍していこう、家庭でも男女が協力して家庭を作っていこうとの考え方で、同じ学びを学校でもした方がいいと考えています。

男女共学化を県教育委員会が進めようとしている一つの理由がそれなんです。男の人と女の人と同じ学びをするのに、男女の共学化は望ましいと思っているということです。それに対して、Gさんがおっしゃったように、弊害がないとは思っていません。共学の課題はたくさんあると思っていますけれども、ただ同じ学びをするのに同じ場所で、同じ人から、同じ時間に同時に学ぶことが、先ほどAさんからデートDVの話もありましたけれども、重要なことだと思っているのです。それが共学化を進めていこうとしている考え方の一つです。

皆さんにいろいろなご意見があるように、県教育委員会の意見に賛同してくれとか、正しいと申し上げるつもりはないんです。県教育委員会の考え方、報告書の方針の一つの理由ということです。

生き生きと生活できる、共学校で、女子が嫌な思いをする、おそらく男子もあるのでしょうか。そういう話もありましたが、男はこうとか、女はこうとか、女子校だからとか、男子校だからという意識があるとすると、その意識自体が男子と女子を特性で分けて、能力とか、生き方の判断をする落とし穴に入っていく可能性があるのではないのかなと考えています。

男性と女性を特性に分けることは、性別にあった仕事だとか、女性はこのことに合っているとかが、男性はこっちに合っているとかが、昔からある既成の概念に絡め取られてしまう、落とし穴がどこかにあるのではないかなと思うのですけれども。そこについて、皆さんは男性と女性の特性があって、カリキュラムだけではなくて、校風とか伝統も含めて、女子には女子のやり方がある、男子には男子のやり方がある、これは必要なことなのか、それとも見直すべきものなのか。県教育委員会の考え方に拘る必要はありません。そこについて皆さんのお話を伺いたいと思います。

男子校は男子校としての校風があるべきか、行事があるべきか。Dさんどうですか。

(D)

あるべきだと思います。自分が通っている学校では、入学してすぐに校歌応援歌練習があるが、校歌応援歌練習をやったりとか、集会で校歌を歌うときに、結構、気楽に肩を組んで歌うのがよいと感じています。

(B)

女子校だから、こういうものになったというよりは、一つの方角、一つの県立高校としてこういう伝統があるってということで、女子校っていう理由だけじゃないと思う。女子校という理由だけで、別学だけの行事があってはいけないってということではないと思います。

(依田 高校改革統括監)

それは女子校ということではなくて、学校の伝統であるとか、行事っていうのは個々の学校それぞれであるべきで、女子校だからとか男子校だからっていうことは望ましくないってことですか。

(B)

そういう考え方があってもいいと思いますが、そういう理由だけではないと思います。

(依田 高校改革統括監)

その理由も一つの理由であっていいとは思いうことですかね。分かりました。

(A)

校風とか、それならではの教育っていうのは、別に分けられるというのは、あるかもしれないんですけども、男子は仕事に行って、女子は家庭をもって子供を育てろっていう教育だったと私はそう認識しているんですけども、分けられた方が効率が良いっていう話は聞いてはいるのですが、それはそれでなんか違うよなっていう気がします。

自分でやりたいって、選択したことだと思うので、それも自分で見て、自分は、特化した話とかも聞いてみたいとか、興味があった上で入学してるんじゃないかって思っています。

女子校、男子校で別々で話があっても、食い違いとかあってもいいのではないかと思います。

(G)

先ほど、おっしゃったように女子校は一般的に見たら、静かって大人しい感じでイメージ持ってらっしゃって、男子校は割と騒がしい、そういったイメージを一般的に持たれてると思います。実際は、女子校から見ても別にそんなこともなく、それによって生まれた校風とかもそこまで強いのではないと思います。伝統というのも難しくて、女子校だから出来上がったものではないという、Bさんの考えに賛同しています。

ステレオタイプがそこにあるんじゃないかと言われると、外側から見てたら確かにそう見えるかもしれないけど、実際に別学校に通っていて、それを実感することはほとんどなかったように感じます。

(F)

基本的には、Gさんの考えと同じで、一つ付け加えることがあるとすれば、別学だからこういう教育、こういう校風というのは、絶対にないと言えるかと言われると、100%ではないと思うんですけど、これは共学にもあることだと思ってて、皆さんの話とか聞くと、中学校時代共学では男は力仕事をやる、女性は家庭科の授業で頼りにされる、そういうのが共学でも実際にあったことなので、別学だからこうっていうわけじゃなくて、共学にもこれは実際ありえることだと思う。これは別学の話だけではなく、共学、別学を含めた教育全体として、考えるべきじゃないかなと思います。別学だからこうというわけではないと思います。

(依田 高校改革統括監)

男子は男子の校風があったり、学校行事があったり、学校生活がある、女子には女子に合った学校生活、教育、学校行事がある校風がある。それぞれ男子と女子で違いがあった方がいいのか悪いのか、皆さんの意見はどうですか。

(E)

私は、よくないと思っています。別学に通っていることで、男子はこう、女子はこうっていう、そのステレオタイプな考え方が膨らんでとは思わない。先ほどFさんやGさんがおっしゃったように共学だからこそできてしまうステレオタイプな考え方もあるとは思ってます。

ただ一つ私の経験から疑問としてあるのが、県教育委員会も男女のあり方、男はこう、女はこうっていうのはない方がいいっていう考え方なんですよね。私が高校で授業を受けた際に、これはたぶん女子がいっぱいいる環境だから言われたことだと思うんですけど、「皆さんは大人になったら子供を産もうね」って言われたことがありました。そのセリフは、女はこうって言われてるものでもあるけど、でも女性にしかない特性だからこそ、まあ言われたことでもあると思うんですね。

社会は女はこうだって求めている部分もあるし、少子化的な問題から考えると。なので、一概には言えないっていうのも少し思いました。

(依田 高校改革統括監)

その発言は、県教育委員会の見解は、適切ではないですね。女子に対して、「子供を産もうね」との表現をしたのは、適切ではありません。

(E)

これは女子校だから、できた落とし穴だと思いますか。

(依田 高校改革統括監)

女子校ではなくて、それは教員だと思いますね。適切ではないですね。

県教育委員会の考えをもう一度お話をします。女子とか男子とかではなくて、個々の生徒一人一人の個性にあった教育が必要だと考えています。それはその一人一人の能力もあるでしょうし、希望もあるでしょうし、そうしたものを踏まえて一人一人に合った教育が必要だと思っていて、男子校だからこうだとか、女子校だからこうだとか、共学だからとかっていう考え方を持ってはいないです。あくまで生徒一人一人個々を見るべきだっていうのが県教育委員会の考え方ですね。

その上で、県教育委員会が共学化を進めようとしているのは男子に合った教育とか、女子に合った教育とかではなくて、一人一人に合った教育をしようとした時に、男子と女子とを分けること自体に積極的な意味を持っていないのです。ただ、異性がないところで生き生きと生活ができるであるとか、また先ほどGさんからあった、性差別的な問題であるとか、これの存在を否定するわけではない。それは十分気をつけなくてはいいけないし、配慮しなければいけない。今、現実に皆さんが通っている学校についてどうすると決めているわけでもなければ、いつまでどうすると決めているわけではないんです。ただ、県教育委員会は積極的に男女を分けて男女別々の教育をしようという考え方を持っていない。同じ勉強をしてもらいたいと思っているんです。

同じ先生から同じ場所で同じ時間に同じことを学んでほしいというのが県教育委員会の考え方なんです。ただ、共学は、現実、男子と女子と一緒に学ぶ中で、異性間で具体的に問題が発生する。別学には異性がない以上、具体的な生徒間の問題はほぼ発生しないと言っていいと思います。なので、どうしても共学は課題が出てくるんです。共学のパラドックスという言葉があるわけですが、共学であるが故に社会にあるジェンダー観がそのまま学校生活に入ってきて、女子は、男子はといった教育が顕在化しやすいということはある。

県立高校は、90%以上共学ですから、十分気をつけなければいけないことだと思っています。

【休憩】

（依田 高校改革統括監）

続きを始めます。男性と女性、それぞれ学びに違いがあつていいのかという話を、皆さんと意見交換してきたのですが、副参事の出井さんが共学校の校長先生をやった方なんで、皆さんから別学の話はいろいろ聞いたので、共学の話をしてもらおうと思います。

（出井 県立学校部副参事）

まずは皆さん様々なご意見をありがとうございます。一つの事例についてお話ししたいと思います。共学が良い、別学が悪い、という話ではありません。私の経験で事例としてお話ししたいなと思っています。

私がいた共学校は、私が赴任した時には、先ほどの例で言うと、ミスター、ミセスコンテストが文化祭の中でありました。

2年目のときに、二年生にいた女の子の弟が中学校3年生にいました。その子が入学したいと相談を受けました。自分は男の性なんだけど、中学校時代からスカートを履いて、セーラー服で登校していたとのことでした。多様な場所に自分の身を置きたいということで、次の年に実際に入学しました。

その子が入学してくるとなった時に、問題とかそういうわけではなくて、子供たちもそうだし、先生方もかなりの時間をかけて話し合いをしました。どうしたらいいんだろうということを。先ほど海外への留学の例とかあったけれども、それを考えるべき時代なんだなと。次の年の文化祭がどうだったかっていうと、子供たちが、生徒会も含めてみんなで考えて、その子のことを考えた時に、ミスター、ミセスコンテストをやらない、いろいろな子たちがいるんだということになった。

一番重要だと思ったのは気づきでした。これまでの考え方っていうのはずっと変わらないのではなくて、いろいろな点で考えなくてはいけないっていうことですね。これはどっちが良い、悪いのでもない。子供たちの意見だって大事です。それを受けて大人が違うんだと蓋を閉めてしまうと変わらない。そうではなくて、みんなで考えていく。考えていくことによって、現時点はこうなんだからっていう話だけではなくて、次はどうしたらいいんだ、そこに一石を投じるのは気付いた皆さんなのではないかと思って聞いてました。共学校、別学校良い点がどちらにもあるし、悪い点もどちらにもある。事例ですけども、共学校でも変えられるっていうことです。

最後に一つ加えると、その子が昨年卒業していきました。その時にやはり来てよかったという話をいただいています。みんなと一緒に考えることができた。自分が、どうにかして社会を変えたいということを高校時代学ぶことができた。それは一緒に空間にいたからできたことであって、こういうこともあるという事例です。

（依田 高校改革統括監）

先ほど学校行事の話があり、出井副参事に話をしてもらったが、去年、報告書を作るに当たって、共学校にしても別学校にしても様々、例えば生徒会の役員の男女比とか、学校行事とか、ほかにもいろいろ、男女別学・共学に関わらず調査をしました。調査をする中で、県教育委員会が考えたことは、個々の学校行事について、男装コンテストが悪いとか女装コンテストが悪いとか、その行事自体悪いとかどうだとかは考えたことはないんです。県教育委員会では、それがどういう意味付けで行われている行事かというところに留意をしました。

男らしさとか女らしさを強調するが故にやっている学校行事だとすると、どこかに男女の特性に合った教育が必要だとか、女性に合った仕事、男性に合った役割とか、いわゆる性別による役割分担意識をすり込むことになってしまう可能性があるんじゃないかと考えました。個々の学校行事の善し悪しではなくて、その学校行事、校風も含めてですけれども、そういうものも含めて、特定の性別による役割分担意識をすり込むようなことになっていないですか、そこは各校、気をつけてください、必要な見直しをしてくださいということは伝えているんです。

別学・共学ではなくて、別学であれ共学であれ、それが行われている一つ一つの意味付けを、皆さんにも問いかけてほしいと思っています。男装コンテストが、男性の何を評価してそれをやるのか、社会の文化の中に位置づけられた概念みたいなものに対し、自分たちが侵されていないのかどうなのか、女装コンテストって中で女性をどう評価するのか、社会的な観念みたいなものを生徒に植え付けるような要素になっているのかいないのか、そういったものをどう解釈しながらやっていくのか。女子の体育祭はダンスですね、男子は棒倒し、騎馬戦ですね、そのこと自体は別に問題はないわけです。ただ、それにジェンダーによつての役割分担であるとか、特性みたいなものを刷り込むようなことを意図してやっているとするのなら、そこについては考えていただく必要がありますということを学校には伝えているんです。県教育委員会の言っていることが正しいというように思わないで結構です。県教育委員会の考え方としてお伝えしているのですから。皆さんの中でもそういったことは考えていただいていた方がいいのかなと思います。それは、一人一人の特性に合った教育が必要だと考えているので、一人一人ダンスが得意な人もいでしょう、走り得意な人もいでしょう、力持ちの人もいでしょうし、力のない人もいでしょう。様々な個性に合った教育をするためには、性別によって、こういう教育、男子校はこうだとか、女子校はこうだとかというのは、なしにして、一人一人合った教育を男子校にしても、女子校にしても、共学にしても、しないといけないと考えたところなのです。そこで皆さんにも先ほど伺って、男子校、女子校のお話っていうのは大変参考になったわけです。

私の話にしても、出井副参事のお話しにしても、皆さん思うことありますか。

【発言者からの申出により一部削除】

(□)

--

(依田 高校改革統括監)

--

(E)

もし、それを考えるのであれば、個人が行うことに意義を考えるのであれば、それは共学であろうと、女子校、男子校であろうと何も変わりがないですよ。それなのに共学を推進する理由は何ですか。

(依田 高校改革統括監)

男の人と女の人で同じ学びをしてほしいと思っていますと言いました。ただ、男子校と女子校については、そこに男らしさとか女らしさとかっていうのが忍び込みやすい環境にいるんじゃないかと考えているんです。忍び込みやすい。

女子校にはこういう学校行事や伝統があって、歴史があって校風があって、男子校にはこういう歴史があって校風があって学校行事がそれぞれ、皆さんがおっしゃったようにあるんだと思う。それにどういう意味付けをしてるのかを問いかけてくださいと、特に男子校、女子校には強く伝えています。共学では男女が一緒に過ごしているので、問題が顕在化しやすいし、分かりやすい。男子校、女子校には、それが伝統行事であったり、自分たちで良いと思っているまま、その行事の問いかけがなく、良いものとしてそのまま引き続いてる可能性がある行事があるのではないですかと言ってるのです。

(E)

それに関しては県教育委員会の方で、その学校の先生方にそういう校風とかについて、その男女の意義を出さないような行事にすることによっていうのを勧告してるって先ほど話をしているということでしたが。

(依田 高校改革統括監)

勧告っていうか、そういうことを県教育委員会は学校に伝えてるんです。男女共同参画社会にふさわしい教育のあり方を考えてくださいということ。

(E)

その結果、男子校、女子校はそれに伴ってない教育を今現在しているということですか。

(依田 高校改革統括監)

個々の個別のことを言っていない。例えば男子校のとある行事についてふさわしくないとか、これが良いとか悪いとは言っていないんです。ただ、その行事をどういう意味合いで皆さんはやっているのですか、生徒にどういう風に伝えてるのですか、生徒さんとどういう考え方でこの行事を引き続きやっているのですか、それをよく自分たちの中で点検をする必要があるということ言ってます。良い、悪いは学校が考えることですね。県教育委員会ではないと思っています。

(E)

男子校、女子校だと、それを伝えているけれども、それに対して、男女共同参画社会に対して今何か足りていないから、共学化を推進しているんじゃないかなって思ったんです。女子校、男子校、共学で平等なのであれば、それを先生方に伝えている時点で、それ以外のことは尊重すべきだし、結局それで男子校、女子校を無くすっていうのは個々に委ねられた考えを、切り捨てているように伝わります。

(依田 高校改革統括監)

Eさんの質問はよく分かります。最初の方に話をしたんですけど、県教育委員会は、男女が同じ学びをすることをよしとしてきて、それは何十年前からそうなんだという話をしたと思うんです。ですから男女が同じ学びをする以上、同じところで学ぶのが望ましいと思っているんです。

ただ、今Eさんが言ったように、だからと言って県教育委員会がその個々の学校をその共学にしたってことはこれまでないんですよ。学校が主体になって、自分たちの学校がどうあるべきかを考える中で共学化をしたこともあるのですけれど。去年、県教育委員会がこれまでのスタンスの何を変えたかという、「主体的に共学化を推進する」というように変えた。今までは、県教育委員会は共学化を推進します。各学校もそれはよく分かってください。その上で、各学校個別の事情があるんで、それぞれ各学校ごとに考えてください。今残ってる12校はそのまま別学として、残っているわけです。学校で具体的に共学化を検討したことを県教育委員会に伝えたことがなかった。県教育委員会も各学校に共学化になるように頑張らなさいみたいなことを言ったことはなかった。これからは各学校だけじゃなくて、県教育委員会も主体的に考えるようにしました。

なぜなのかですよ。そこは、今までのジェンダーの話であるとか、そういうこととは違う話になるのだけれども。少子化の話になってしまう。皆さん、この後どのくらい、中学校3年生が減っているか分かりますかね。10年、15年で。

(B)

15%くらい。

(F)

去年の生まれた人数が確か80万か75万人くらい。

(依田 高校改革統括監)

具体的な数値を事務局に聞いてみましょう。

(事務局)

令和6年3月と令和20年3月を比較して、今後公立の中学校等卒業予定者数がどうなっていくかを出生の状況から推計したものです。

令和6年3月の約58,900人が、令和20年3月で約44,100人となり、約14,800人が減少することが見込まれています。割合で言うと、25%程度が減少していくという状況になっています。

地域ごとで見えていきますと、例えば東部・利根地域ですと、14,668人が10,349人と、4,319人の減少、30%程度減少していくという状況が見込まれています。

(依田 高校改革統括監)

令和20年に全県でいうと25%程度、東部・利根地域でいうと、3割程度減少する。単純計算にすると、学校を3割くらい減らさなければいけない話になるんです。小学校のように、2クラスとか1クラスの学校にできるのなら残せるが、高校は1クラス2クラスというわけにはいかないのです。クラス担任の先生がみんな教えてくれればよいけれども、皆さんの学校には多くの先生がいるのではないかな。社会だと日本史の先生がいたり、地理の先生がいたり、理科だと化学、物理、生物など、それぞれで先生がいたりすると思う。それぞれの教科の専門性を持った

先生に教わりたいと思うと、学校の先生の数は法律で決まっています、一定の規模がないと、高校の学びのレベルは一定程度のレベルにはならなくなる。専門性を生かして先生に教えていただきたいということが高校の場合があるので、一定の規模の学校を残さざるを得ない。となると、学校の規模を小さくできない以上は、学校の数を減らしていかざるを得ないことになる。

さらに、高校の数を減らす中で、高校ごとの学びがある。農業、工業、商業、普通科の高校もある。皆さんは普通科の高校が多いと思うんですけども。いろいろな種類の学校をバランスよく残して、学校を減らそうとすると、似た学びの学校を統合していく必要が出てくる。これまではまだ、皆さんのお住まいのところではない地域の学校が統合されることが多かったのかもしれないのだけれども、これからは県内全ての地域の全ての学校でどうするのかを、県教育委員会は、地図を見ながら、地域によって、行ける学校が極端に不利にならないようにしなければいけないし、工業も農業も商業も必要だ。

そうすると、確かに男子校、女子校も、大変意義のあるものだと言いますが、皆さんの話だとあるわけですが、同じ学びをする学校が近くにあった時に、共学、別学同じ話ですが、共学校も含めて同じ学びが近くにあった時に、どう整理するのかという、同じ学びをしている学校を統合したりしながら、バランスをとって再編整備を進めていかなくてはいけなくなってくる。

さらに今までない学校のタイプもこれから必要になってくる。例えば、中高一貫の学校も必要だとか、海外の大学に進学できる国際教育プログラムが導入されているような学校も必要だとか、定時制とか通信制といった多様なライフスタイルにあった学びのできる学校も作った方がいいとか、ほかにも、いろいろあるでしょう。そういう新しいタイプの学校を作るとすると、学校を整理しながら作っていかなくてはいけない。そうすると新しい学校を作って新しい学びができますよって言った時に、その学校にどちらかの性別しかというわけにもいかない。女性も男性も学べるようにしないと、男女の教育機会の均等が図られなくなってしまう。

そういうことを考えた時に、決して皆さんの学校一つ一つの話ではないですが、これからは今までのように県教育委員会が方針を出して、各学校で考えてくださいということではなくて、県教育委員会が全体の県内の学校のバランスを考えながら、その地域に残す学びの種類として残そうとした時に、どうしても別学校が共学化をせざるを得なくなってくるということも考えなくてはならない。

学校に考えてくださいって話ではなくて、県教育委員会が主体的に考えなければいけないので、私どもはもとから推進する立場だけれども、これから新しく再編していく学校も、男女の教育機会の均等ということを考えれば、新しく作る魅力ある高校は、男女が通える学校にせざるを得ない。なので県教育委員会の方で引き受けますということなんです。

ここまで皆さんと意見交換させていただいたこととは別の話として、県教育委員会が進めていかなければいけない再編整備と合わせて、共学化についても検討せざるを得ない状況になったということです。

教育内容だけであれば、別学だからと言って、男女共同参画社会にあった教育ができないと言ってるわけではない。それは共学も別学も課題がある。ただ別学には危険性があるから、より注意が必要ですと言ってるのに留まっていたんです。当然学校の中でも今後の学校を考えていかなければいけないんだけど、ただそれを飛び越えて、県教育委員会の方で考えて行く時代になってきたということを、昨年の報告書では打ち出したと理解してほしい。皆さんにとっては、残念な話なのかもしれないけれども。

共学別学の議論よりも、学びの確保、男女の教育機会の均等の確保を私どもとしては優先しますよってということを、報告書の中では言っていないんですけども、結論的にはそういうふうに捉えていただいていいと思います。それが正しいと言っているのではないですから。意見があれ

ば、お話しください。県教育委員会の中で共有をして、大切な意見として受け止めていきますので。おっしゃってください。

(F)

少子化に伴って、いろいろな高校を残して、いろいろな学びの種類を残すっていうことでしたが、5年、10年後で、未来の話なので、予想ができるんですけど、確実に分かることではないという前提で話をすると、10年後に、どういう高校の形態が必要があるのかは分からないと思う。例えば、工業高校に行く人たちが減るかもしれないし、その分、通信制に行く人たちが増えるかもしれないし、別学に魅力を持って別学に行く人がいるかもしれない。様々な需要がある中で、その需要に合わせて残す高校を合わせるっていうことはできないですか。

(依田 高校改革統括監)

大切な観点だと思いますよ。そこは重要だと思ってます。

(F)

今後、その別学校の倍率がしっかり1を超えている、つまり別学の需要があるっていう場合は、いくら少子化してても、これは別学が共学にしない、そういう考えでいいですか。

(依田 高校改革統括監)

そうではないですね。倍率は確かに一つの考え方だと思います。中学生が志望する学校とはあまり志望がない学校で違うだろうというのは、Fさんがおっしゃるとおりだと思います。

ただ、私どもは単純にそうは思っていないです。例えば、もうすでに1倍を割り込んでいる学校は、たくさんあるんです。例えば0.5倍になってる学校もある。地域によって著しい学びの格差を生まないように考える、地域による学びの格差という意味は、いろいろな学びがその地域にあるということです。倍率だけで考えているのではなくて、社会のニーズとか生徒のニーズも重要な観点だと思っていますが、倍率だけではない学びの公平性は必要だと考えてます。

(F)

こういった学校が少なくなった地域とかに対して、例えば通信高校とかそういうのを例えばいろいろ誘致するなりして、ほかの教育形態、普通科高校と違う教育通信高校とかの別の変わった教育形態を提供するとか、そういう解決策はどうですか。

(依田 高校改革統括監)

あると思いますよ。大切なことだと思います。ただ、それと男女別学・共学はもしかしたら、別学校をそういう学校にしようということもあります。

(E)

となると、この共学化問題っていう名称があまり良くないのかなってと思いました。その地域ごとに統合するっていう方を先に出していただいた方が、その共学化問題っていうと、その男女別学が悪いっていうふうに捉える人が多いと思うんですね。だったらその別に未来として別学がニーズとして残るかもしれないので。ほかの共学が潰れるかもしれないってのを考えるんだとしたら、私が別学もニーズにあると思ってる人の意見だからこう思うのかもしれないんですけど、

共学化という名称ではなく、地域統合化ですとかそういうふうに名称化して、また別の問題としてしっかり、それも意見を考えて討論してもらうのもいいのかなと思いました。

（依田 高校改革統括監）

Eさんのおっしゃることはよく分かります。ですが最後に少子化の話を持ってきたのは、今日の意見交換会の主題ではないからです。皆さんと一時間半ぐらいかけてお話をした方が今日の主題です。男子校、女子校、共学化、それと男女共同参画社会に向けての教育のあり方、そういったものを皆さんの意見を聞きたかったのです。

今、Eさんがおっしゃったように、男女別学が悪いように見られてしまうというところは気をつけないといけません。そこは気をつけます。私どもとして、別学は県教育委員会として、本当大切にしてるんですよ。

どの別学校も、決してこの学校が悪いとか、必要ないと全く思っていない。本当に大切な学校だと思っているんです。皆さんの通学している学校が問題があると申し上げているつもりはありません。今回の報告書の考え方を私はお伝えをしている。その考え方について、皆さん方は反対をしていただいて問題はないですし、批判的に、県教育委員会とかいわゆる行政側が発信する情報に対して、批判的な目でその点検をする、意見を述べるということが、大切なことだと思うので、そのこと自体、私の言うことを聞いてくださいと、私は申し上げているつもりはありません。

（G）

質問いいですか、その先の少子化の問題で、その生徒のニーズに合わせて学校を調整して統合していくようになるとおっしゃってるじゃないですか。倍率以外でどうやってそのニーズを測るのかなっていうのが単純な疑問としてあるんですけど、どうすればいいのでしょうか。

（依田 高校改革統括監）

いろいろなニーズがある。中学生のニーズはあります。あとは社会のニーズもある。どういう人材が求められているのか。そういったものも考えなければいけない。倍率も、ニーズを測る上では大切なものの一つ。もう一つは、地域の産業であるとか、また世の中の社会の今後の行く末であるとか、今後の産業社会の中で、どういう人材が求められていて、それは社会に求められているからというよりかは、これからの社会を生きる、生徒一人一人がどういう学びを身につけた方がこれからの社会でより幸せに生きることになりやすいのかということ、ニーズとして県教育委員会は捉えて、学校の再編整備、統合だけじゃなくて、学科再編とか、学び自体も変えることも必要になってくると思っているのです。

隣の学校が変わった時に、その隣の学校がこのままでいいのか、この学校の学科・学びも変える中で、このように変えようとか、統合するだけではなくて、全体の構成を考えなくてはならない。地域であるとか、今後の社会であるとかを考えて見据えながら、学校の学びを作っていくのがニーズだと考えているのです。

それにはたくさんの人の意見を聞いたり、たくさん情報を集めることが重要だと思います。県教育委員会には、よく要望書が上がってきます。例えばこういう学校がほしいですとか、この学校にはこういう学科がほしいですとかですけど、そういうものにもよく耳を澄ましながら。毎年中学校3年生の10月や12月の調査や最終倍率なども万遍なく眺めながら、あとは他県の学びを見ながら、海外などは調べられていないんですけど。これからの時代は外国の情報も必要かもしれません。

(G)

中学校もやはり変わってきています。体育の共習など。そういうものに対してのそういう教育を受けた生徒たちが、どういう高校を求めているかっていうニーズもすごく変わってくるわけじゃないですか。それを共学校だけで、例えば性的被害を受けた人が女子だけの環境に入りたいっていうのができなくなる可能性もこれから出てくるわけじゃないですか。そういう人たちが共学校に入って、どうやって守られていくかっていうのもすごい大事になってきます。

(依田 高校改革統括監)

そうですね。Gさんがおっしゃったような中学校の時、小学校の時に辛い思いをしてこの学校に入ったんだという生徒さんの声を聞きました。そのほか、中学生、高校生のアンケートでも特定の学力がないと入れないような別学は不平等だという意見。中学校の時に学校に来れなくなっている。例えば、男の子にいじめられた女の子が、学力が低いわけです、不登校でいたわけなので。公立高校で女子校を一生懸命探してこの学校に2時間半かけて通学しているなど。今皆さんがおっしゃったような異性が苦手で、異性がいるところで学びたくない生徒さんの中においても入学できる学校がないと思っている人がいる。先ほどFさんがおっしゃったように、通信制や定時制や私学に通学しているのかもしれない。

根本的な問題は共学にあると思う。共学校で嫌な思いをしたわけです。共学校で異性との問題が起きた。共学だから起こったのですけれど、ここをどうするのかという課題に向き合わないといけない。共学校の問題。それは男子にとってもそうでしょう。男子校に行った時も共学校で女子にいじめられていたという男子の声は聞きました。男子も女子も一緒だと思います。共学校のこのパラドックスをどうすればいいのかをちゃんとしていかない限りは、根本的な問題解決にはならないと思っています。

12校が残る、残らないとはまた別次元の問題として、どう異性との関係を、その生徒間のトラブルを直していくのかは、学校にある根本的な問題だと思っています。

これは共学校で、取り組んでいるのだけれど、うまくいかない現実もあって、スクールカウンセラーを入れるという対応もしているけれども、たくさんの経費がかかったり、問題が起こってからのカウンセラー対応では遅いという話も聞く。

そもそも学校の教育をどうするのかとかという根本的な問題なんだと思っています。答えになっていなくてごめんなさい。Gさんおっしゃってることはよく分かる。それは男女別学共学の問題以上に大きな問題として県教育委員会は捉えています。

(G)

分かりました。ありがとうございます。

(依田 高校改革統括監)

時間が延びてしまったので、最後にどうしてもという方がいればお話してください。

(D)

ちょっと戻るんですけど、人口の減少に伴って高校再編していくって話で、最近は工業高校とか、商業高校なんかは需要が低くなってるっていうことを耳にするんですけど、その商業高校であったり、工業高校を先に再編するっていう形で検討してる感じなのでしょうか。

(依田 高校改革統括監)

そこは、県教育委員会とはちょっと考え方が違うかな。県教育委員会は、商業高校とか工業高校のニーズが少なくなるとは思っていないんです。確かに倍率だけ見ると、商業高校とか工業高校の倍率は決して、高くはないことはそのとおりなんだけれども、工業高校や商業高校に対する社会的なニーズは高いものがある。工業高校の充実はいろいろなところから求められている。商業高校も、今、情報教育を中心にして、商業系の学科はより充実しないといけないと、多くの方が考えている。

国では普通科の学びを変えていく必要があると考えています。普通科改革と言っている。県教育委員会は地域でバランスよくいろいろな学びができる、選択肢を子供たちに与え続けることを優先的に考えているので、商業や工業を優先的に減らしていくことを考えてはいません。

(D)

分かりますけれど、最近では大学に進学しようって思っている子供の割合が増えている。それに伴って、工業高校や商業高校のニーズが下がっているのではないかと思います。

(依田 高校改革統括監)

工業高校や商業高校の進学率は専門学校も含めれば、半分ぐらいは行っていて高いです。いわゆるAI開発だとか、ロボット開発だとか、先進技術みたいな学びを専門的に伸ばそうという人もたくさんいて、そういった学びに対する社会のニーズもある。だから、Dさんの言ってる大学進学率が高いのは正しいんだけど、それは普通科だけの学校に求められていることではなくて、より高度な学びは、いわゆる産業系の学校にも求められている。普通科の高校も大学進学がだいたい変わってきているでしょう。普通科の高校も今までみたいに、いわゆる知識を身につけて、受験に備えるのではなくて、設定したテーマから自分の考えを述べることもできるとか、探究的な学びの中で何を探究してテーマを持って学んできたかどうか。そういうどちらかっていうと、産業系の学校で今までやってきたような学びがこれからの普通科高校にもどんどん求められてきているわけ。共学別学関係なく、皆さんの学校も今後は、探究的な学びがより重視されるようになってくると思います。Dさんの言うことは正しい部分もあるけれど、今の県教育委員会はそう考えてはいないです。

よろしいですね。時間ですので、皆さん熱心な意見交換、どうもありがとうございました。大変参考になりました。感謝いたします。